

コメニウスにおける幼児教育の思想について

On the Thought of Preschool Education in Comenius

(平成 18 年 9 月受理)

笠井 哲* (KASAI Akira)

Abstract

The purpose of this paper is to consider the thought of preschool education in Comenius. He says that we must show children the following, a pious heart, manners and character, practical knowledge, till they become 6 years old in *Indicator of the Mother School*. The method of his intuition education became the origin of a principle of not only a professor principle in school education of afterward but also preschool education and childcare. He was the pioneer who discussed a principle of preschool education.

1. はじめに

コメニウス (Johann Amos Comenius 1592-1670) は、チェコスロバキアのモラビアの小村に生まれた。チェコ語ではコメンスキーといい、コメニウスはラテン語名である。父は裕福な製粉業者でボヘミア同胞教団の熱心な信者であったが、コメニウスが 10 歳の時に死亡した。続いて、母親や姉妹たちも死亡し、彼は 12 歳で孤児となったが、父方の叔母に養育され、4 年間の初等教育をボヘミア同胞教団の付属の学校で受け、そこで読み書きや計算を習った。

その後、プシェロフのラテン語学校に入学し、2 年間人文主義教育を受け、1611 年牧師になるためにプロテスタント・ルター派のヘルボルン大学で神学を 2 年間学び、またアムステルダムやハイデルベルクにも留学した。彼は、1614 年プシェロフで初等学校の教師となり、1618 年フルネックに移り、教団の執事や教団付属の学校長を務めたりしたが、その年に勃発した 30 年戦争に巻き込まれて妻と二人の子を失い、1628 年神聖ローマ帝国のカトリック強化政策から逃れてポーランドへ避難した。ポーランドでは、コメニウスは隠遁的な生活の中であったが、リッサのギムナジウムで教師や校長として教育法を研究し、その間にラテン語が母国語と対照的に印刷されているテキスト『言語の扉』や『大教授学』を著し、普遍的な学問で、すべての学芸に通用する汎知学の普及のために著作に専心した。彼は「近代教育の父」⁽¹⁾と称されている。

教育学上の主著『大教授学』(1632) では、彼は 6 年間で区切る学校制度を提唱し、その最初の段階として「母親学校」を位置づけた。それは通常の意味における学校ではなく、誕生から 6 歳までの乳幼児を対象とする母親による家庭教育を意味した。『母親学校の指針』(1633) においては、幼児期の教育が家庭教育であるべきとしつつ、幼児の集団教育の必要も力説している。本稿の目的は、コメニウスにおける幼児教育の思想について考察することである。

2. 人間観と児童観

コメニウスは、教育史上で最初の体系的教授法や階梯的な学校制度を論じた主著『大教授学』において、もしも人が真の人間となるべきであるならば、彼は教育されねばならない⁽²⁾。

と述べ、

人間の人間たる所以のものに於いて、訓練せられた者でない限り、何人といえども人間と呼ばれることはできない⁽³⁾。

と述べている。これは、

* 福島工業高等専門学校 一般教科 (社会) (いわき市平上荒川字長尾 30)

教育は実に万人に対して必要なものである⁽⁴⁾。

ことを意味している。つまり、コメニウスによれば、人間は、神の伴侶となるために神の似姿として想像されているので、他の動物と異なり理性をはじめ不断に自分の能力を働かせることにより、来世における永遠の生命を獲得するための準備をしなくてはならないのである。コメニウスは、そうすることが教育の目的なのであり、また教育の仕事に一身を捧げようとするを肝に命じなければならないと述べている⁽⁵⁾。

このような人間観が、キリスト教プロテスタント派のボヘミア同胞教団の牧師であったコメニウスが持っていた人間観であり、いわばそれはキリスト教的人間観そのものといってよいであろう。したがって、彼の児童観もそのような人間観に基づいているのである。すなわち、彼は『母親学校の指針』において、

幼子は、この上もなく高価な、神の賜物⁽⁶⁾

であり、

幼子を自分自身のものではなく、神の幼子、神のために産み出された幼子として、私たちが尊重すべきである⁽⁷⁾。

と述べている。そして、彼は子どもを尊いものと見なければならぬ理由として、子どもは、

私たち自身の本質から生じ、私たち自身と同じ⁽⁸⁾

であり、

私たちの後に続く世界の住民……相続人、となる⁽⁹⁾。

存在であるからと述べている。それゆえ、コメニウスによれば

自分のために抱く情愛と尊重を、幼子に対して抱くのは、私たちの義務⁽¹⁰⁾

であり、

幼子は、親にとって、銀、金、真珠、高価な宝石よりも高価なもの⁽¹¹⁾

である。

子どもは我々自身の分身であり、後継者であるというこの彼の論述は、教育の機能の一つである「社会の存続」という概念を含むものであり、教育を考える上での重要な視点である。しかしそうした考えは、一方で非キリスト教的な児童観として解釈されるかもしれない。だが、コメニウスの児童観では、むしろ前者の幼子は神の賜物であるという思想に主眼があって、後者はそのことを説明し、補完する考えとして我々に身近な理由として挙げていると考えるべきであろう。なぜならここでの論述には、「子どもは、罪の無い者ですから、まだ汚れてはいない神の模像です」という『聖書』の章句を引用し、子どもは、

親の原罪を除けば、自分では、何一つ過ちを犯していない⁽¹²⁾

と述べていることから、基本的にはキリスト教的な性悪の人間観を基底としており、子どもの尊重とその賛辞を『聖書』に従いながら表明していると解釈できるのである。このようなコメニウスの児童への賛歌は、彼の『母親学校の指針』から 130 年後のルソーの『エミール』の冒頭の有名な章句、

万物をつくる者の手をはなれるときすべてはよいものである⁽¹³⁾

という性善説的な人間観や児童観の先駆的な思想といえるのである。

3. 幼児教育の目的

コメニウスにおいては、前述のように

人間は神の似姿であるから、人はあらゆるものの知識を獲得する能力を備えている⁽¹⁴⁾。

ので、

教育は実に万人にして必要なもの⁽¹⁵⁾

となるのである。

また、コメニウスによれば、神の模像である子どもも当然その点は同様であり、特に子どもは

柔軟であって、外界から来るあらゆる印象を受容するように適している⁽¹⁶⁾。

ので、

幼少の頃に於いて、人を正しい知恵の標準に合するように形成するという事は、極めて賢明なこと⁽¹⁷⁾

である。

また、コメニウスは、『大教授学』の第28章において、「母の学校の理念」として、

人間の全生涯に於いて必要なすべてのものは、早くこの最初の学校に於いてこれを植えつけねばならない⁽¹⁸⁾。と述べ、幼児からの教育の重要性を強調している。そして、コメニウスは『大教授学』の第27章の「年齢と進歩との段階に基づく、学校の四分制について」の中で、教育史上で最初の体系的な階梯的学校制度について論じている。特に、コメニウスは人間が成長するには25年間くらい必要とするので、幼児から成人に至るまでの24年間、教育が継続されるべきであると論じ、各段階の教育期間を6年として、次のような四つの階梯に区分している⁽¹⁹⁾。

第一段階	幼児期	6歳迄	母親学校（家庭での母親の膝）
第二段階	少年期	12歳迄	基礎学校（村の公立国語学校）
第三段階	青年前期	18歳迄	ラテン語学校（都市のギムナジウム）
第四段階	青年後期	24歳迄	大学（王国や邦のアカデミー）

コメニウスは、これらの学校はそれぞれ異なったものであるが、「真実の人」を形成するという同じ問題を異なった方法で教育しなくてはならないとし、全体を通して一步一步進むように段階づけられなくてはならないと述べている⁽²⁰⁾。このような学校体系とその教育内容の階梯的な区分は、世界最初のものといわれているように、極めて先見的なものであって、彼は母親学校と国語学校までは男女共学を構想し、教育の目標をそれぞれ外的感覚器官の識別能力の訓練、手や言葉とともに内的感覚による想像力と記憶力の訓練に置いている。

第三段階のギムナジウムでは、感覚による知識や判断力の陶冶のために弁証法や因果律を学び、第四段階のアカデミーでは靈魂の平安を保つための能力を神学が授けるように、精神には哲学、肉体の活動には医学、財産のためには法学を学ぶとともに、特に意志の力を陶冶することが目的とされている⁽²¹⁾。

ところで、主題である幼児教育の目的については、『大教授学』第28章の「母の学校の理念」よりも体系的に論述されている『母親学校の指針』の第四章の「幼い者を……6歳までの時期に習熟させるべきこと」にしたがって論及しよう。この『母親学校の指針』は、

一六三一年ごろ、亡命者のためにまずチェコ語で書きはじめられた。それをドイツ語に直してあらためて出版したというのが真相である⁽²²⁾。

コメニウスは、『母親学校の指針』において、6歳になるまでに子供たちに教えなくてはならないこととして、(1)「敬虔な心」、(2)「作法と品性」、(3)「実践的知識」の三つを挙げ、宗教教育や徳育と知育のそれぞれを論じている。第一の宗教教育においては、神の探求や認知と神との一体化が目標とされ、第二の徳育では中庸、身だしなみ、作法、気配り、従順、正直、正義、勤勉、沈黙、我慢、奉仕、礼儀、慎み深さなどの徳性が陶冶目標となっている。そして第三の知育においては、「知る」、「行う」、「話す」という三つの能力の陶冶が目標とされている⁽²³⁾。

そこで、「知る」べきこととしては、自然学の知識、具体的には自然界の無生物的な事物と人を含む動物や植物の名称を学ぶこと、したがって今日の科学の区分からすれば地学や生物学や医学の領域での事物の名称を覚えることが目標となっている。また、これらの領域の他に、光学、天文、地理、年代、歴史、家政、政治に関することの初歩的な知識や概念を理解することが、教育の目標や内容として考えられている。同様に、「行う」ことでは頭や口や手を動かして質問と応答の初歩の形式と算数や幾何、音楽と工作などの初歩や基礎の修得と、また「話す」ことでは発音、修辭、詩の暗誦によって話す訓練をすることなどが目標とされていて、いわゆる知育の具体的な領域として述べられている⁽²⁴⁾。

4. 幼児教育の内容と指導方法

コメニウスは、『母親学校の指針』の第5章から第10章において、幼児教育の指導方法について論じている。第5章では、「健康」の教育が論じられていて、母親への胎教から始まって、授乳や離乳食などの乳幼児にふさわしい食生活について述べ、特に実母による授乳が子どもにとって身体のみならず精神的にもどれほど望ましいかを詳細に論じている。また、1歳児の「あやし」には楽器を使い、3歳児前後の遊びでは快いものに目をとめさせて感覚を楽しませ、目や耳などの感覚を刺激することを強調している。

第6章の「理解力」の育成では、先に述べた「知る」べきことがらを、自然界を歩かせて体験させ、目で「観

察させることによって」⁽²⁵⁾事物の識別をさせ、事物を示しながら言葉で名称と概念を一体化させることを説いている。そして、寓話や空想的な話も子どもの知能や理性を育むので話して聞かせる必要性和、また道徳の教育では遊びの場で子どもが悪習に染まらないための配慮を説いている。

第7章の「行為と作業能力」の育成では、幼児は活動を好むので、幼児の活動を尊重し、模範を示して合理的にできるように助けること、そして危険なものは除くが、その他は何でも使って

いつでも遊ばせ、そのことによって、肉体を健康に、精神を鋭敏に、肉体の器官を敏捷で機敏なものになるように育てていく⁽²⁶⁾

ことが説かれている。この「行為と作業能力」は精神的な作業を意味するもので、先に述べた「行う」ことによって育成される知識教育の領域に属するものである。具体的には、算数の初歩として3歳児までに5から10くらいまでは数えられるようにすること、また4・5・6歳までには20くらいまで順序正しく数えられるようにすることが説かれている。そして、足し算や引き算などを教えて子どもたちを煩わせるのではなく、それまでに数の大小や偶数と奇数の識別ができるようにすればよいのであって、子どもは2歳くらいで幾何での図形の大小や長短を、4歳までに図形の区分、円や線、十字形と尺度の名称などを覚え、やがて物の測量をするようになると述べている⁽²⁷⁾。

さらに、「音楽」については、音楽は人間にとって自然なものであり、幼児の泣き声も音楽であって、子どもは早くから音に関心があるから、3歳までにメロディーやハーモニーの鑑賞の枠内で適度に音楽を提供するのがよいと説いている。そして、5歳までには小曲や讃美歌を歌わせ、リズムやメロディーを理解できるように、家庭で家族と一緒に歌ったらよいと述べている⁽²⁸⁾。

第8章は「言語能力」の育成についてであり、「理性」と「言葉」が人間固有の重要なものとして説かれ、文法や修辭法や詩が言語能力を育成するものとして論じられている。文法では、2歳から3歳までに短く発音しやすい単語の発音練習を、4歳でアクセント、5歳・6歳までにその延長として語彙を豊かにすることを説き、言語の練習には「遊戯」を通して行うと効果があると説いている。また、1歳から2歳までに「ジェスチャー」や「動作」によってコミュニケーションができるようにし、3歳から5・6歳まではさらに「比喩」や「模倣」によって言語の意味づけをすることが課題となっている。そして、詩について、子どもは言語を覚えるに伴って「ハーモニー」と「リズム」を楽しむようになるので、3・4歳までは遊びながら童謡を歌ったらよく、5・6歳までには短い詩を暗誦させれば言語能力はさらに進歩するであろうと述べている⁽²⁹⁾。

第9章は、いわば道徳教育に関わるものであり、コメニウスは「作法」と「品性」の育成で具体的な指導の方法を論じている。すなわち、乳幼児期の道徳の指導では、(1)「絶えざる実例」、(2)「適時の、分別ある忠告」、(3)「程よい懲戒」を原則にして行うべきであると述べている。コメニウスによれば、中庸、気遣い、従順、正直などの徳目の指導では、それらについて家庭での親や年長者の配慮があれば、言語による「教え込み」や「強制の懲戒」は必要でなく、何よりも子どもたちに必要なのは彼らの見本となる大人の行為であり、子どもによい実例を示すことが極めて重要なのである⁽³⁰⁾。

また、実例で示す際に「諭し」や「懲戒」が必要な場合があり、それらは普通第一段階の懲戒であって、子どもの不適切な行為に対する「理性的な処罰」とされている。しかし、子どもが改心しない場合は、「小さな鞭」や「手で殴る」という第二段階の懲戒が必要とされる。コメニウスは、子どもが理性や理解力がなく反抗したりすることに対し、「鞭と叱責が知恵を与える」という『聖書』の文句を引用して、粗野で自分勝手な子どもが育つことを厳しく戒めている。それには、まず大人が子どもに自分勝手という種子を蒔きついたりしないように、大人が見本を示すことが前提となっている⁽³¹⁾。

さらに、コメニウスは、道徳の徳目それぞれの指導において気をつけることとして、「中庸」には食べ物に過度の美食を避けさせ、3歳ころまでには身だしなみができるようにし、「正直」については事実を事実として反す習慣をつけさせるようにしたらよいと述べている。とりわけ、「我慢」については

過度の可愛がり、甘やかしが排除されていれば、子どもにはとにかく我慢が当たり前のことになり⁽³²⁾ 得ると述べ、2・3歳までの間に「わがまま」や「強情」は何か別のことに熱中させることによって矯正し⁽³³⁾、泣き叫んでも気にしてはいけません⁽³⁴⁾。

と極めて具体的な方法を説いている。この「熱中」ということで、コメニウスは子どもが、

遊んでいるときは、精神は必ず何かに熱中し、頻繁に研がれさえする⁽³⁵⁾。

と、子どもたちを「遊び」という「作業」に誘うのがよいと説いている⁽³⁶⁾。

ところで、「敬虔な心」を育成する宗教教育については、子どもにささやかな理性が現れる2歳ころに年長者の祈る姿に馴れさせ、身をもって実例を示しながら短いお祈りがいえるように教えるべきであると述べている。また、3歳・4歳・5歳では、さらに少しずつ長いお祈りがいえるようにし、6歳までには短い詩を親と一緒に唱えるようにしたらよいと述べている。そして、コメニウスは、以上の幼児期の教育のすべてについて、

学習は労働ではなく、本とペンを使った遊びであり、砂糖以上に甘いものだ⁽³⁷⁾。

ということをよく話し、6歳を過ぎて学校に行く前に、

学校や学習への熱意を持たせる⁽³⁸⁾。

「自発的な心」の「構え」をする必要を説いている。その際、常に気をつけなくてはならないのは、

学校での懲罰、先生の激怒、今後遊べないこと⁽³⁹⁾

などについては話さず、不安や恐怖心を感じさせないように、学校の教師や学ぶ知識がすばらしいものであると誉めたたえることを要求する。さらに、幼児が5・6歳になるまでの教育は、何よりもすべて遊んでいるかのようにして、子どもが理解できることだけに留めるべきであると「遊び」を重視し、強調しているのである⁽⁴⁰⁾。

以上、コメニウスの幼児教育の目的ないし目標と、教育内容の領域から手順や方法に至るまでの所論を述べたが、コメニウスが教育学上で感覚論的な直観教授論を集大成した教育家と評価されていることから、次にコメニウスの直観論と直観教授論を問題にしたい。

5. 教育方法としての直観

教育史上、直観が問題とされるようになるのは、17世紀に至ってであり、17世紀の時代精神であった自然科学の思潮のもとに台頭した「感覚的実学主義」においてである。17世紀に至り、教育はベーコンの新しい哲学によって基礎づけられた自然科学により、新しい実証主義へと導かれたのである。すなわち、ベーコンは、認識の対象を自然科学へと向け、経験的感覚から実学的知識を獲得する方法を確立したのである。このような自然科学の隆盛の中に勃興したのが感覚的実学主義の教育運動であり、コメニウスはその代表的な教育思想家であったのである。したがって、

人は彼を「教育界のベーコン」と呼ぶ⁽⁴¹⁾。

のである。

彼は、世界で最初の絵入りの教科書である『世界図会』を作成した教育家であり、教育の過程に視覚に訴える教材を導入し、知識を子どもの感覚に訴えることによって習得させる直感的教授法を創始した教育家である。コメニウスの「直観思想」を彼の主著『大教授学』によって考察しよう。

『大教授学』とは、

すべての事を、すべての人々に教えるための普遍的な技術を論述した⁽⁴²⁾

ものであり、

科学を学び、徳性を養い、敬虔の心に充たされ、かつまたこのような仕方、青年が現在及び将来の生活のために必要なすべての事物を学び得るところの学校を建設するよにとの勧告の書⁽⁴³⁾

であって、いわば人類の幸福や学校の改革と教授法の改善を意図している。コメニウスは、同書でベーコンをはじめとする自然科学の基礎を形成した哲学者や科学者の名を挙げたり、彼らの学説を引用したりしていないが、自然を知識の源泉とする科学教育について言及している。コメニウスは、

自然の導きによって、人はあらゆる事実の知識を取得し得る⁽⁴⁴⁾。

と述べて、

科学的訓練は、理解力、言語能力及び手の器用さを向上させる⁽⁴⁵⁾。

ものであると述べている。そして、彼は科学を教育する方法を九か条にして述べていて⁽⁴⁶⁾、それらを要約すると次のような三つの原理となる。

(1) 事物は、実物を示すことによって、その本質と原理を簡潔に教え、応用可能になるように教えなければならない。(2) 事物は、その差異に重点を置いて判明・明晰となるようにし、完全に理解した後に先へ進むように教えなければならない。(3) 事物の学習には、まず一般原理を説明し、細部はその後に順序よく関連づけ

て説明して教えないといけない。

ところで、このような自然界のあらゆる事物を観察し、知識を修得しようとするコメニウスの方法は、当然経験論者の説く認識の方法と軌を一にし、経験を基本とするものである。すなわち、コメニウスは経験がなければ、我々の有する悟性は例えば文字の書かれていない白紙のような空虚なものであって、行為したり、話したり、物を認識したりすることができないのであると述べている⁽⁴⁷⁾。経験が認識の期限であるとするこの論述は、経験的知覚、言い換えれば感覚的知覚を重視しているのであり、まさにコメニウスにおいては、

知識の始まりは、常に感覚から起こらねばならない⁽⁴⁸⁾。

のである。彼によれば、外界にあるすべてのものの認識は、人間に与えられた視野や聴覚をはじめとする感覚器官が、内在する合理的精神である理性を助けることによって可能になるのである⁽⁴⁹⁾。したがって、コメニウスにおいては、

すべての知識は、感覚的直観から始まり⁽⁵⁰⁾、

教育においても、

すべてが感覚的直観を通じて教授せられる⁽⁵¹⁾。

のである。

このようなコメニウスにおける直観教授に至る認識の過程は、哲学上の認識論では、合理論の立場ではなく、経験論の立場に近い。なぜなら、コメニウスにおいては、すべての知識は感覚的直観から始まり、次に想像作用を媒介として記憶の領域に進み、そして個々の事実を基礎として普遍的な理解が可能になるのであり、さらに最終的に理解した事実の判断によって知識は確実になるからである⁽⁵²⁾。このコメニウスの認識論の縮図ともいえる論述は、イギリス経験論の著名な哲学者ロックのように、一もつともこのコメニウスの『大教授学』はロックの『人間悟性論』より 52 年前に書かれたものであるが一白紙説に立ち、また事物を直接的に外官により把握し、それを内官によって表現するという考え方⁽⁵³⁾は、ロックの外的経験感覚と内的経験感覚を想起させるものであり、コメニウスにおける直観は、経験論の系譜に位置づけられるのである。

一方で、コメニウスは、

神は多くの事物を創造したが、これも同様にまた我々の利益のためであって、神はこれによって我々がこれに携わり、これによって修練しまた我々の心を教育する材料に、何ら事欠くことがないようにした⁽⁵⁴⁾。

とか、万物の中に働くものはすべて神であり、人間はただ深い心をもって教えの種を受け容れるばかりであると述べている⁽⁵⁵⁾。このように、彼がいう感覚的直観によるあらゆる事物の認識は、すべて神の象徴としての事物の模写的な認知ということになり、コメニウスにおける直観は、受身的で一方的な受容性の原理として捉えられるのである。

以上のような認識の原理を教授の方法に導入したのが直観教授に他ならない。それでは、コメニウスにおける直観教授の方法の実際的、具体的な論理や学習の形態はどのようなものであろうか。彼によれば、教育活動はすべてを容易に生徒の心に刻み付けるために、できるだけ感覚活動を通じて行われなければならない⁽⁵⁶⁾、学習は、

最初実物によって理解力を訓練し、然る後言語で表現することを学ばねばならない⁽⁵⁷⁾。

のである。そして、この原理の具体的な学習の形態では、次のようなことが注意して行われなければならない。聴覚は常に視覚と結合していなければならない。言葉は常に手と結合して訓練されなければならない。そして教えるべき材料はただ単に言葉のみにより、したがってただ耳に訴えることなく、これを絵画によって説明し、したがって目の援助の下にこれを想像力に印象づけねばならない。さらに生徒は彼らの口ではなすことを学び、彼らが口で語ることを同時に手によって表現することを学ばねばならない。そしてすでに学んだことが、十分に、眼、耳、理解力及び記憶力に印象づけられるまでは、次の材料に移ることのないようにしなければならない。この目的のために、教室の壁の上に、たとえ教訓であろうと、法則、絵画、図表等であろうと、教室の中で取り扱うすべての事を、絵を見るように一目瞭然と掲示することが望ましい⁽⁵⁸⁾。

のである。これらの教育の具体的な論述は、感覚的直観をすべての教育現場に導入したものであり、あらゆる知識は視覚（眼）から始まり、聴覚（耳）と触覚（手）の連携のもとで表象され、理解されるべきであるという、まさに直観教育を強調している。

ところで、こうした直観による教育が行われるべきであるというコメニウスの主張の背景には、当時の非直観的な教育の現実があった。それをコメニウスは次のように述べている。これまでの学校では、

知性の中に優しく教え込むことのできることを、暴力によって印象づけ、いなむしろ暴力によって詰め込み、あるいは叩きこんだ⁽⁵⁹⁾。

ゆえに、

学校は子供等にとって恐怖の場所であり、知性のと殺場であり、そして大多数の学生は、学問や書物に対する嫌悪感を抱いて早急に学校を飛び出し、技術家の工場やその他の職業に赴くのである⁽⁶⁰⁾。

といった状態にあった。実に、当時の学校教育では、生徒を無意味で重要でない学習に没頭させ⁽⁶¹⁾、ただ単にオウム返しの口先だけのおしゃべりを飽きさせるほど行わせた⁽⁶²⁾。結果としてそうした学校では、

道徳的に陶冶せられた品性は養われないので、鷹の、うわべだけの道徳家、えり好みする、とってつけたような文化のつけやきば、世間的な虚栄心のみに慣らされた眼や手や足ばかりが造り出される⁽⁶³⁾。

ことになったのである。

このような教育や学校の実態は、教育史的には教養の源泉をギリシアやローマの古典に求めた人文主義の墮落、すなわち言語や文体の形式にこだわり、内容や意味を軽視したキクロ主義や、聖書をはじめとするキリスト教教義を一方向的に教授した問答法に原因があり、それこそコメニウスが直観教授法を論じて批判と改革の対象としたものに他ならない。彼は、言葉のみで内容の伴わない事物の暗記やきまりきった章句の問答によって行う教育に反対し、

事物と言葉とは同時に認識の対象として提示されねばならない⁽⁶⁴⁾。

として、

如何なる知識も書物上の権威に基づいて与えられるべきではなくて感覚並びに知性による現実的な証明によって権威づけられるべきである⁽⁶⁵⁾。

と論じ、文献中心主義の教育の批判と、その改革に直観主義教育を対置したのであった。まさに、以上のようなコメニウスの直観教育の方法は、教育史上で以後の学校教育における教授原理のみならず、幼児教育や保育の方法原理の原点となったのである。

6. おわりに

『母親学校の指針』における幼児教育は、フレーベル⁽⁶⁶⁾の幼稚園を連想させるが、ペスタロッチー⁽⁶⁷⁾の『ゲルトルト教育法』の居間の教育に近いものである。コメニウスは、近代後半の著名な二人の児童中心主義の実践家であったペスタロッチーとフレーベルの教育思想の源流となっている。まさに、コメニウスは、幼稚園教育を本格化したフレーベルやペスタロッチーに先んじて、幼児教育の原理を論じた先駆者である。

以上からわかるように、コメニウスは 18 世紀の近代教育の源流に位置していて、今日ではルソーが「子どもの発見」の最初の教育思想家といわれるが、コメニウスはルソーより 100 年余り前の「子どもの発見」の先駆者であり、文字通り子どもの理解者であった。

このように、ルソー、ペスタロッチー、フレーベルらのすぐれた幼児教育思想を概観する時、そこにはコメニウスの思想が源流として流れ込み、受け継がれ、発展しており、近代的な幼児教育思想の先駆者としてのコメニウスの教育思想は一段と評価されるべきであろう。

註

- | | |
|---|--|
| (1) 玉川大学教育学科編『教育の名著 80 選解題』
玉川大学出版部、1983 年、22 頁。 | (7) 『母親学校の指針』、14 頁。 |
| (2) コメニウス『大教授学』稲富栄次郎訳、玉川大
学出版部、1956 年、73 頁。 | (8) 『母親学校の指針』、18 頁。 |
| (3) 『大教授学』、74 頁。 | (9) 『母親学校の指針』、14-15 頁。 |
| (4) 『大教授学』、78 頁。 | (10) 『母親学校の指針』、18 頁。 |
| (5) 『大教授学』、40 頁参照。 | (11) 『母親学校の指針』、17 頁。 |
| (6) コメンスキー『母親学校の指針』藤田輝夫訳、
玉川大学出版部、1986 年、13 頁。 | (12) 『母親学校の指針』、16 頁。 |
| | (13) ルソー『エミール 上巻』今野一雄訳、岩波文
庫、1962 年、23 頁。 |
| | (14) 『大教授学』、58 頁。 |

- (15) 『大教授学』、78 頁。
- (16) 『大教授学』、82 頁。
- (17) 『大教授学』、84 頁。
- (18) 『大教授学』、344 頁。
- (19) 『大教授学』、339-340 頁参照。
- (20) 『大教授学』、341-342 頁参照。
- (21) 同前。
- (22) 堀内守『コメニウスとその時代』玉川大学出版部、1984 年、pp. 105-106 頁。
- (23) 『母親学校の指針』、35-37 頁参照。
- (24) 同前。
- (25) 『母親学校の指針』、56 頁。
- (26) 『母親学校の指針』、64 頁。
- (27) 『母親学校の指針』、66-67 頁参照。
- (28) 『母親学校の指針』、67-70 頁参照。
- (29) 『母親学校の指針』、71-76 頁参照。
- (30) 『母親学校の指針』、78-79 頁参照。
- (31) 『母親学校の指針』、80-83 頁参照。
- (32) 『母親学校の指針』、89 頁。
- (33) 『母親学校の指針』、90 頁参照。
- (34) 同前。
- (35) 『母親学校の指針』、88 頁。
- (36) 同前参照。
- (37) 『母親学校の指針』、110 頁。
- (38) 同前。
- (39) 『母親学校の指針』、109 頁。
- (40) 『母親学校の指針』、105 頁参照。
- (41) 篠原助市『欧州教育思想史 (上)』玉川大学出版部、1972 年、139 頁。
- (42) 『大教授学』、13 頁。
- (43) 『大教授学』、13 頁。
- (44) 『大教授学』、62 頁。
- (45) 『大教授学』、195 頁。
- (46) 『大教授学』、251-256 頁参照。
- (47) 『大教授学』、76 頁参照。
- (48) 『大教授学』、246 頁。
- (49) 『大教授学』、61 頁参照。
- (50) 『大教授学』、182 頁。
- (51) 『大教授学』、172 頁。
- (52) 『大教授学』、182 頁参照。
- (53) 『大教授学』、342 頁。
- (54) 『大教授学』、137 頁。
- (55) 『大教授学』、149 頁参照。
- (56) 『大教授学』、188 頁参照。
- (57) 『大教授学』、156 頁。
- (58) 『大教授学』、188 頁。
- (59) 『大教授学』、108 頁。
- (60) 『大教授学』、107 頁。
- (61) 『大教授学』、191 頁参照。
- (62) 『大教授学』、108-109 頁参照。
- (63) 『大教授学』、107 頁。
- (64) 『大教授学』、155 頁。
- (65) 『大教授学』、202 頁。
- (66) フレーベルについては、拙論「フレーベルの道徳教育論」、『研究紀要』(福島工業高等専門学校) 第 31 号、1995 年、26-33 頁参照。
- (67) ペスタロッチーについては、拙論「ペスタロッチーの人間観」、『研究紀要』(福島工業高等専門学校) 第 32 号、1996 年、76-82 頁参照。